伝統地場産業「アブラギリ」の復活を通した地域コミュニティの場づくり

特定非営利活動法人 WACおばま［福井県小浜市］

団体設立の経緯

WACおばまは、2004年6月にオープンした「小浜市ボランティア・市民活動交流センター」に参集した市内NPO法人・任意団体の運営協議会としてスタートしたものです。

その後、2006年にNPO法人格の認証を受け、まちづくり・子ども健全育成・中間支援を主な活動内容として、小浜市内外の各種団体・行政・企業商店街等と協働で様々な活性化事業に取り組んでいます。

まちづくり活動としては、NPOボランティア団体・社会福祉団体・地域団体・行政・企業などと広く連携し、中心市街地活性化・歴史文化保全活用・里地里山活性化などをテーマに、年間数回のイベントを開催したり、会議体を作って活動のあり方について議論をしたりしています。

子ども健全育成としては、夏休みにおける理科体験教室（天体観測、化石採取）などを実施しています。

また、中間支援としては、市内を中心に県内全域でのNPOボランティア活動のアドバイス等を行政と連携して行っています。

地域概要

福井県小浜市は、福井県南西部にある人口3万人あまりの小都市です。古来より京都・奈良との結びつきが強く、「御食(みけつ)国(くに)」と呼ばれる食材提供地であるとともに、仏教伝来初期の寺院等が神仏混淆を残して現存し、さらに江戸時代の古い町並みや祭礼もよく保存されており、国宝・重要文化財をはじめとした文化財が多くあります。

本活動地域である小浜市上根来（かみねごり）地区は、かつて小浜から京都へ鯖を運んだ「鯖街道」沿い、遠敷（おにゅう）川上流の滋賀県との県境近くにあり、小浜市街地から車で30分、標高300mほどの山間小集落です。

かつては炭焼き・アブラギリ（種を圧搾して桐油を取る）を主産業とし、人口は最大300人を数えました。石油輸入に伴いこれらの産業が廃れてからは植林を進めましたが外材輸入増加とともにこれも廃れ、昭和末期には畜産団地を運営したものの牛肉自由化とともにこれも廃業せざるをえなくなりました。

このように山奥の小集落でありながら国際経済に翻弄された上根来集落は、現在居住者は実質なく、すべてが空き家になっています。

アブラギリの収穫期は晩秋です。11月初旬、上根来のアブラギリ群生地で若狭東高校の学生たちと一緒に収穫しました。

設立年月 ･･･2004 年 6 月設立　2006 年 8 月法人化
メンバー数 ･･･16 人
代表者名 ･･･ 理事長　鳥居直也（とりい・なおや）
連絡先 ･･･〒917-0078　福井県小浜市大手町 5-31　小浜市中央公民館　小浜市ボランティア・市民活動交流センター内
☎ 0770-53-2456　apec@arrow.ocn.ne.jp
団体のミッション ･･･ 福井県小浜市の市民・各種団体と連携し、地域づくりのため、まちづくり・子どもの健全育成・科学技術の発展・社会福祉の増進および他団体の支援を行うことを目的として活動しています。

活動に至った理由や背景

今では無住の上根来（かみねごり）ですが、その一方で、元住民の多くは遠敷川（おにゅうがわ）下流地域に移転し、車で20分程度で上根来集落に来ることができます。

このため、集落に残る自宅の維持管理や畑仕事、集落内の清掃活動や法事などの年中行事の一部が現在でも維持されており、無住なのに地域コミュニティが残っている、ユニークな限界集落です。集落内の道路も老朽化しておらず、まだ十分使える家屋も多く残っています。さらに畜産団地跡は屋根つきの広いオープンスペースで、様々な活動の場として活用可能です。

このように地域資源がまだ残っている一方で、上記活動の主要メンバーは50代～70代で、その次世代は上根来で生まれ育っていないため、「この活動も自分たちの世代で終わり」というさみしい言葉も聞かれます。

こうした実態を知るにいたり、この自然豊かな地をこのまま荒れ果てさせてしまうのはしのびない、まだ活動しているメンバーがいる今が最後のチャンスだと考え、2011年から里山再生への取り組みを模索してきました。

活動内容の概説

上根来地域の里山再生を目指し、地元住民・地域まちづくり委員会・森林組合・地元産業高校などと連携して2011年度から開始した「上根来プロジェクト」は

①里山トレッキングなどの自然体験型観光
②自然素材を活用した伝統的工法による治山
③今も自生するアブラギリを活用した地場産業

から成りますが、本活動はこのうち③を引き継ぎ、さらに発展させようとするもので、アブラギリの様々な部位の多面的活用策を探ろうとしたものです。

具体的には、以下の3つの取り組みを行いました。

アブラギリの樹からはじまる、新しい挑戦。

① 桐油圧搾

アブラギリの実を採取し、種を取り出して圧搾して桐油を収穫する。

畜産団地跡に密集箇所があるので、ここを中心的に上根来地区および遠敷川流域全体で実を収集し、若狭東高校産業技術課実習室を拠点として圧搾手法を開発しました。

6～8月ー分布状況の調査

アブラギリの分布状況を調査し、畜産団地跡地周辺に密集地があることを確認しました。

9月ー収穫の準備

アブラギリの実は10月に落ちるため、効率的な実の収集を目的として、実の多いアブラギリの下にネットを張りました。冬季積雪量が2mを超えることもあるため、簡単に撤去できる構造としました。

10月ー実の収集と活用方法の検討

実の収集を始めました。9月に襲来した台風18号の影響で未熟な青い実がかなり落ちたため、収量が見込みを下回る可能性が出てきたことから、当初予定していた畜産団地跡地だけでなく、上根来集落内随所、遠敷川流域などにも範囲を広げ、みんなで手分けして少しずつ収集しました。

また、若狭東高校から保護者・地域住民に対してアブラギリ収集協力のお願いチラシを配ったところ、多くの方が実を集めてくださいました。

10月には、圧搾器具の開発検討を若狭東高校にて3回ほど行いました。

さらに桐油の活用方法として、木工製品のニスとしての塗布実験、特産品の若狭和紙を使った日用品や屋外装飾品などの製品化について小浜市内専門家と打ち合わせをしました。

11月ー実の収集

11月7日、若狭東高校と上根来畜産団地周辺で実の収集を行い、米袋に6袋ほど集めました。実は畜産団地跡で一週間ほど乾燥させた後、若狭東高校に運びました。

またこの日は上根来集落内で伝統治山工法「しがら組み」を行いました。これは木杭と竹を使って人力施工で作る簡易土留め工で、かつては用材伐採後などに日常的にどこでも行われていましたが、土木工事の機械化の中で忘れ去られようとしていたものです。

中央写真:上根来畜産団地跡に並べられたアブラギリの実。ここで一週間ほど乾燥させてから若狭東高校に運びました。
上から:アブラギリの効率的な収穫のためにネットを張る/若狭東高校の学生たちと収穫/同じく若狭東高校の学生と殻を割る器具の開発検討/同じく割れた殻と種をふるいで選別/以前は一つ一つペンチで割っていましたが、ずいぶん効率的に種を選別できるようになりました。

②葉寿司の開発

アブラギリの葉を使った「葉寿司」を開発し、商品化を探る。

先進地である福井県永平寺町では、鱒寿司をアブラギリの葉でつつんだ葉寿司を作り販売しています。この生産販売グループに作り方をご教示いただき、小浜風にアレンジして小浜市特産の「へしこ」（鯖の糠漬け）を使った寿司を使った葉寿司を考案し、へしこも昔ながらの作り方で漬けたものを使うこととしました。

開発には小浜水産高校や市内ホテル業者等の協力をいただき、2013年9月に福井市で開催された里山国際会議では参加者の弁当に採用されました。

6～8月ー葉の採取

葉を800枚あまり採取し、ストッカー（冷凍庫）に保存しました。

9月ー葉寿司の試作品づくり

小浜市内で食の新製品開発に取り組んでいるグループと一緒に、葉寿司の試作品を作りました。ちょうど福井市で開催されていた里山国際会議にて、「里山弁当」として使っていただきました。

11月ーアブラギリの枝打ち

実の収集作業に並行して、いくつかのアブラギリを選び枝打ちをしました。これは、先進地である永平寺町のグループから、枝打ちをしておくと虫に食われにくい良質の葉が取れると教わったためです。

12月ー「へしこ」の取り出し

アブラギリシンポジウムの前日、昨年漬けた「へしこ」を取り出し、寿司を作りました。

③キノコ栽培

アブラギリの幹を榾木にしたキノコ栽培の可能性を探る

2012年12月に、福井県林業課の協力をいただきワークショップで試作をしました。その結果、2013年秋から冬にかけてウスヒラタケ、エノキ、エチゼンカンタケが順調に発生し、アブラギリの幹が榾木として優秀であることがわかりました。

そこで2013年は原木100本を用意して、より本格的な種駒打ちによる植菌を行うとともに、本格栽培に意欲のある若手農家とともに、さらに50本の榾木を作りました。

4～9月ー育成方法の検討

昨年度の植菌したウスヒラタケが良好に生育しましたので、これをもとに、効果的な植菌および育成方法について3回打合せと試食をしました。

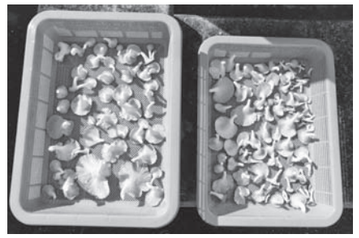
11月ーシンポジウムに向けて

ウスヒラタケに続いてエノキ、エチゼンカンタケも順調に発生しました。12月のアブラギリシンポジウムに備えて塩ゆでしたものを冷凍ストックしました。

また市内レストラン業者とキノコ料理について打ち合わせ、アブラギリシンポジウムでの試食メニューを決めました。

12月ー原木採取

アブラギリシンポジウムの一週間前に榾木にするための原木採取を行いました。20本ほどを伐採し、これから100本あまりの原木を作りました。



アブラギリの葉は手のひら大で柔らかく、葉寿司に最適です。

ゲストハウス整備

また、上記活動拠点としてゲストハウスを整備しました。上根来集落内に空き家をご提供いただける住民がおられたため、これをお借りして、休憩・食事・宿泊ができる施設として営繕を行い、すでに数組の宿泊をいただいています。

4～7月ー営繕

ゲストハウスとして使用するための簡単な営繕（棚等をそろえ、脱衣場のスペース確保、古畳の確保と敷設など）を行いました。

8～9月ー宿泊体験

3グループに宿泊体験をしてもらい、使い勝手などを確認するとともに、オープン記念バーベキューを催しました。

10～12月ー活動拠点として活用

アブラギリの実の収集などの活動拠点として使用しました。

12月ー冬囲い

積雪に備えて冬囲いをしました。

アブラギリシンポジウム

12月15日、これまでの活動成果の市民向け発表の場として「アブラギリシンポジウム」を若狭東高校で開催しました。

まず高校性がこれまでの活動内容を発表し、そのあと葉寿司とキノコ料理を試食、午後は桐油圧搾見学・体験とキノコ植菌があり、参加者は自分が植菌した榾木を持ち帰りました。

これまでは若狭東高校の産業科だけでアブラギリに取り組んでいたのですが、今年は生活科がキノコ料理などで協働してくれ、活動の幅が広がってきました。またしがら組みなどの里山保全全般に幅を広げ、「アブラギリシンポジウム」を「里山シンポジウム」に発展させようという意見が出ました。

その他

9月に福井市で開催された里山国際会議のポスターコンクールに「上根来里山再生プロジェクト」としてこれまでの活動を出展し、グランプリに次ぐ「福井賞」を受賞しました。

上から:キノコ栽培の結果を発表する若狭東高校の学生／市民の前で挨拶する緊張気味の若狭東高校産業科の学生たち／生えたキノコを味見して、どんな料理にするかを話し合う若狭東高校の学生／収穫したキノコは地元野菜と一緒にキノコ汁にして市民に試食してもらいました。好評でした。
左円内:みんなでキノコの植菌をしました。

活動の成果

これまでの活動で、アブラギリが一定の付加価値商品を作り出せる可能性が十分あることがわかってきました。

地域産業として生活を支えるほどではないにせよ、地区住民の皆さんが比較的近傍に居住しておられることから、上根来を仕事場として高齢者の小遣い稼ぎ程度の段階からスタートさせられることは、現実的な目標としていいのではないかと考えています。

また、若狭東高校産業科との協働の中で、卒業後地元に残り、我々の活動に参加してくれる子が出るなど、互いの絆を深めつつあると感じています。

今後の予定

(1) 桐油圧搾

圧搾技術はおおむね確立できたので、今後は用途を探ることが課題になります。

当初は木工製品のニスを想定していましたが臭いなどの問題があることがわかりました。特産品・若狭和紙に耐水浸透性塗料として使うことによる日用品（コースターなど）や屋外装飾品、付加価値のある和傘などへの活用など可能性を探っていきたいと考え、一部試作品を作るなど少しずつ進み始めています。

(2) 葉寿司

商品化してもかまわない品質になったとレストラン業者さんからも評価をいただき、里山国際会議では弁当に使っていただくところまで来ました。

また、アブラギリシンポジウムで使った「へしこ」は「究極のへしこ」として付加価値製品化を進めていますが、このへしこを葉寿司とすることで「海と山の出会いのもの」としてさらに付加価値をつけていきたいと思います。

今回、小浜市内で食の新製品開発に取り組んでいるグループとの協働を行いました。これは今後も続けていく予定です。

(3) キノコ栽培

予想以上に発生がよく、キノコ栽培を仕事として成り立たせることも可能な榾木が得られることがわかりました。

キノコ栽培に取り組んでみたいという若手農家と50本の榾木を3月に作りました。特に今回はきくらげを植菌してみました。市場のきくらげは大部分が中国産の乾燥ものなので、生きくらげのサラダなどとして付加価値化のカギがないかと期待しています。問題はシカやサル等による食害で、有効な対策を考えていかねばならないと思っています。

(4) 上根来全体として

ゲストハウスを拠点として散策・トレッキング・登山・渓流釣りなどの自然体験の場としての整備に取り組んでいます。すでに畜産団地の裏山にはトレッキングコースと休憩所（ベンチ等）が設置してあるのですが、ここから集落に迂回できるルートも整備して、自然を満喫できる周回散策ルートを整備していきたいと考えています。

アブラギリ関係とゲストハウスを中心とした自然体験活動を主なテーマとして、一定の収入が得られるようになることが最終的な目標です。

アブラギリシンポジウムで種の圧搾を市民に実演する若狭東高校の学生。じゅわじゅわと油が搾り出され、「おおー」と歓声が上がりました。